

日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究 —プロトタイプ理論の観点から—

菅谷奈津恵

要旨

本研究では、イク・クル、テイク・テクルの習得について、話者の視点と多義性という観点から分析した。資料は OPI コーパスを用い、英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者計 90 名の発話データから、日本語能力と習得の関連を考察した。その結果、以下のような傾向が観察された。

- 1) 本動詞イクとクルでは、話者の視点と移動の方向が一致するイクのほうが使用されやすい。
- 2) 補助動詞テイクとテクルでは、テクルのほうが使用されやすい。
- 3) 日本語能力が上がるに従い、イク・クルのプロトタイプである人の空間移動からより抽象的な移動へと使用が広がっていく。
- 4) 補助動詞のテイク・テクルにおいても、プロトタイプの物理的空間移動から非プロトタイプである認知的用法、時間的用法へと使用が広がっていく。

また、本研究の調査結果から、イク・クルのような多義語の習得についてはプロトタイプ理論による説明が有効であるという示唆が得られた。

【キーワード】 移動動詞、OPI コーパス、視点、多義語、プロトタイプ

1. はじめに

イク・クルは、日本語の教室で早くから導入される語であるが、補助動詞のテイク・テクルも含めると様々な用法があり、完全に習得するのは困難であると推測される。

多義語の習得については、カテゴリーの認知において典型的メンバーと非典型的メンバーを想定するプロトタイプ理論を用いた研究が行われている (Shirai 1995; Tanaka 1987)。それによると多義語の様々な意味の中でもプロトタイプ的なものが先に習得され、そうでないものは使いこなすのが難しいと指摘されている。本研究では、こうしたプロトタイプ理論に基づき、イク・クルの基本義と周辺の用法及びテイク・テクルへの意味的つながりから習得との関連を考察する。

2. 研究の背景

まず、本動詞のイクとクルについて先行研究を概観すると、両者の使い分けには話者の視点が関与し、イクでは起点側に、クルでは到達点側に話者の視点がおかれるということが指摘されている（大江 1975；久野 1978；森田 1993）。

母語習得に関する調査をみると、齊藤・久慈（1985）は、イクがクルよりも先に習得され、イクは移動主体と話者の視点が一致するため易しいのではないかと推測している。初出形を比較すると、イクでは移動主体＝話者である「行く」、「行こう」が多いのに対し、クルでは「来た」が殆どで移動主体は他者が多いという違いが見られた。また、授受表現においても動作主体と話者の視点が一致するアゲルが、モラウ、クレルよりも先行すると報告されている。

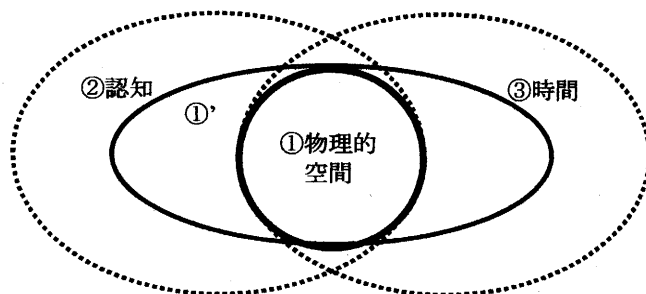
第二言語習得に関する研究をみると、イク・クルは取り上げられておらず、視点表現の中でも授受動詞や受身に関する研究が中心である。授受表現について調査を行なった大塚（1995）では、母語調査（齊藤・久慈 1985）同様にアゲルの習得が早いことが報告されている。従って、視点と動作主体の一致は第二言語習得でも重要な要因である可能性が高く、イク・クルは母語習得と同じ過程を示すことが予測できる。

イク・クルの使い分けには話者の視点が関わっているが、イク自体、あるいはクル自体の習得の難しさは、多義性で説明ができる。Rosch（1973）や Lakoff（1987）によって展開されたプロトタイプ理論は人間の認知構造に関するモデルであり、ある特定の 카테고리の中に内部構造を認め、プロトタイプのメンバーと非プロトタイプのメンバーによって構成されていると考える。例えば、break のプロトタイプのメンバーは、break the vase であり、break the tradition は非プロトタイプのメンバーということになる。カテゴリ内はプロトタイプのものとそうでないものに分かれるが、その構造はプロトタイプのものが中心となり、そこから他の語義が広がっているとイメージできる（田中 1990、第3章）。

こうしたプロトタイプ理論をイク・クルに適応してみると、そのプロトタイプは物理的移動であり、そこから抽象的な用法へと広がっていくと考えられる。浜田（1989）は、人の空間移動という中心的用法から〈移動主体〉と〈移動空間〉という意味要素が抽象化されることによって、非中心的・抽象的な用法へと拡張されていく過程を説明している。抽象化は、特に移動主体に注目することによって理解されやすい。浜田によると、話者が動くときみなす事物はイク・クルの移動主体になりうるが、その中で

も自ら動くことのできる人間が中心的な要素であり、次に動物や、「動く物」としてとらえやすい乗物、台風、郵便物などが続く。さらに抽象化が進むと、時間（例：[年]ゆく年くる年）や認知的なもの（例：[直感]私にはピンと来た）も移動主体として用いられる（例文は浜田 1989）。

以上の説明をもとに、イク・クルの多義の広がり、図示すると、右のようになる。中心に位置するのは、人の物理的移動（①）であり、そこから話者が動く物としてみなしたものの物



理的移動（①'）、さらに認知的移動（②）や時間的移動（③）へと広がっていくと考えることができる。

これまでイク・クルの語義の拡大について述べてきたが、イク・クルが文法化された補助動詞テイク・テクルにおいても、同様の過程が想定できる。テクルを例とすれば、本動詞の基本義が保持された物理的移動がプロトタイプであり、派生的用法として「名案が浮かんできた」のような認知的用法や、「60年生きてきた」のような時間的移動に関係したアスペクト用法が広がっていくと考えられる（Hasegawa 1993）。プロトタイプは、そのカテゴリーの中でより基本的で典型的なものであり、習得しやすいとされる（Rosch 1973；白井 1998）が、イク・クル、テイク・テクルの習得でも、プロトタイプの物理的移動から習得が進むといえるだろうか。また、イクがクルに先行するとすれば、補助動詞の場合も同様にテイクがテクルに先行するだろうか。

すでに指摘したように、イク・クルは日本語学では度々取り上げられてきているが、第二言語でどのような習得過程が見られるかはまだ確認されていない。本研究で調査を行なうことにより、視点表現の発達過程を明らかにしたいと考える。また、本動詞と補助動詞が意味のつながりを持つものとして習得上の難易度をプロトタイプにより説明できれば、教室でのインストラクションに役立てられるはずである。

そこで、本研究では以下の2点を研究課題とし、イク・クルテイク・テクルの習得過程を調査する。

- 1) イクとクル、テイクとテクルでは、どちらが先に習得されるか。
- 2) 日本語能力が上がるに従い、イク・クル、テイク・テクルの用法はどのように広が

っていくか。

3. 研究方法

3.1. 分析資料

分析資料としては、ACTFL-OPIの文字化資料であるKYコーパス(注1)を用いた。KYコーパスは、ACTFL-OPIの基準にそって日本語会話能力が測定されており、初級から超級までかなりの量の文字化資料がそろっている。従って、日本語能力とイク・クル、テイク・テクルの習得の関係を考察するために適した資料だと思われる。対象者の母語は、英語、韓国語、中国語、各30人である。日本語レベルは、各母語で初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている。

3.2. 分析方法

3.2.1. 分析手順

まず、文字化資料からイク・クル、テイク・テクルが使用された箇所及び使用が義務的な箇所を抽出し、用法別に分類した。次に、抽出箇所を正用、過剰使用、非使用(使用が義務的であるが用いられなかった箇所)に分け、TLU値(Target Like Use)を算出した(Ellis1994, pp.75-76)。TLU値は、次のように算出した。

$$\text{TLU 値} = \text{正用数} \div (\text{正用数} + \text{過剰使用数} + \text{非使用数}) \times 100$$

正用、過剰使用、非使用の判定は、筆者が行った。また、本研究の焦点は学習者がイク・クル、テイク・テクルをどこで用いどこで用いないかという点であることから、活用やテンス・アスペクトの間違いについては誤用としなかった。

3.2.2. 用法の分類基準

次に、用法の分類基準について述べる。

まず、本動詞だが、使用例を移動主体により「話者」、「他者」、「その他」の3つに分類し、人の物理的移動から派生用法への広がり考察する。

補助動詞については、抽象的用法がかなり拡大されており、移動主体による分類では不十分である。そこで、Hasegawa(1993)の分類に従い、①物理的空間移動、②認知的用法、③時間的用法の3つに分類した。物理的空間移動と認知的用法は中心的意味からの派生の度合いによりさらにサブカテゴリーを設けた。分類例を以下に記す。

①物理的空間移動

①-1 動作主体の移動 [移動と方向]: テイク・テクルが物理的空間における「移動」

と「方向」を表わし、本動詞の意味特徴が保持されている。この中には、a 移動の様態・手段（例：毎日学校に歩いてくる）、b 動作・行為の順次性（例：ご飯を食べていった）、c 付帯状況（例：学校に本を持ってくる）が含まれる。

- ①-2 動作主体の移動 [方向]：テイク・テクルが移動を表わす動詞につき、移動の「方向」を表わす。（例：猫が井戸に落ちていった。）
- ①-3 対象物の移動：目的語の移動を示す動詞についたもの（例：ジョンが私に花束を投げてきた。）で、テイクは用いられずテクルだけが用いられる。①-1、①-2 と異なり、この用法では動作主体は移動せず、花束などの対象物だけが移動する。

②認知的用法

- ②-1 存在：「女の子が生まれてきた」「兵隊が死んでいく」のようにテクルが出現を、テイクが消滅を示す用法。
- ②-2 知覚：「おなかがすいてきた」のように話者の知覚を示す用法。

③時間的用法

話者が現象を時間的にどう把握しているかを示す用法で、開始（例：雨が降ってきた。）や動作の継続（例：今まで生きてきた。これから生活していく。）が表される。

4. 結果

4.1. 本動詞イク・クルについて

母語別の本動詞の使用状況を表 1～3 に示す。この表からわかったことは以下の通りである。

第一に、合計の欄を見ると、全体的な使用数はクルよりもイクのほうが多くなっていることがわかる（イク：クルの総使用数 [正用+過剰使用] は、中国語母語話者が 165 : 150、韓国語母語話者が 183 : 141、英語母語話者が 183 : 94）。

第二に、TLU 値の欄を見ると、イク・クルともに、どのレベルでも概ね 80% 以上と高くなっていることがわかる。ただし、クルの正用は「中国の西安から来ました。」（中国語母語話者・初級）のように、「(話者及び他者の) 母国から日本」への移動を表わす表現が多く観察された。特に、初級レベルのクルの正用は殆どがこの用法で、中国語母語話者が 63% (5/8)、韓国語母語話者が 100% (9/9)、英語母語話者が 80% (8/10) を占めていた。

第三に、過剰使用の合計を見ると、全体に数は少ないがクルよりもイクのほうが多

く、クルや他の移動動詞を使用すべき箇所にもイクを用いやすいようである（イク：クルの過剰使用は、中国語母語話者で5：4、韓国語母語話者で11：3、英語母語話者で9：1）。例えば、次の発話是一日の行動について話している場面であるが、「インタビュー」は今行なっている OPI を指し、「来ました」とすべき箇所である。

例1) [英語母語話者・初級]

S：うーん。インタビュー、に行きます。ん、今日。【←来ました】

クルの過剰使用については、初級レベルではどの母語でも観察されず、中国語・韓国語母語話者では中級以上に各1、2例、英語母語話者には上級に1例が見られただけであった。例2は上級英語母語話者の発話で、約束の時間に行けないことを電話で連絡するというロールプレイであるが、聞き手のところへの移動にクルを用いている。

例2) [英語母語話者・上級]

T：あ、Sさん、こんにちは、どうしました

S：今日ちょっと用事ができて、来られない、と思うんですけど【←行けない】

これは、母語の come からの転移（大江 1975）の可能性が考えられるが、こうした文脈が他のインタビューにはなかったため、英語母語話者だけの特徴であるのかは、今回のデータからは明らかではない。

【表1：中国語母語話者イク・クル使用状況】

イク						クル					
レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU	レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU
初級 5人	話者	10	2	0	83	初級 5人	話者	7	0	0	100
	他者	2	0	0	100		他者	1	0	0	100
	その他	0	0	0	—		その他	0	0	0	—
中級 10人	話者	57	0	1	98	中級 10人	話者	31	1	0	97
	他者	12	3	0	80		他者	11	0	3	79
	その他	0	0	0	—		その他	0	0	0	—
上級 10人	話者	43	0	0	100	上級 10人	話者	45	0	0	100
	他者	16	0	2	89		他者	13	2	0	87
	その他	4	0	0	100		その他	7	0	0	100
超級 5人	話者	6	0	0	100	超級 5人	話者	20	0	0	100
	他者	8	0	1	89		他者	11	1	0	92
	その他	2	0	0	100		その他	0	0	0	—
合計		160	5	4	95	合計		146	4	3	95

【表2：韓国語母語話者イク・クル使用状況】

イク						クル					
レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU	レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU
初級 5人	話者	7	2	0	78	初級 5人	話者	8	0	2	80
	他者	0	0	0	—		他者	1	0	0	100
	その他	0	0	0	—		その他	0	0	0	—
中級 10人	話者	29	5	0	85	中級 10人	話者	41	0	5	89
	他者	8	0	0	100		他者	9	1	0	90
	その他	0	0	0	—		その他	2	0	0	100
上級 10人	話者	61	4	0	94	上級 10人	話者	32	0	1	97
	他者	25	0	1	96		他者	19	1	0	95
	その他	2	0	0	100		その他	0	0	0	—
超級 5人	話者	27	0	1	96	超級 5人	話者	18	1	0	95
	他者	8	0	0	100		他者	7	0	0	100
	その他	5	0	0	100		その他	1	0	0	100
合計		172	11	2	93	合計		138	3	8	93

【表3：英語母語話者イク・クル使用状況】

イク						クル					
レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU	レベル	移動主体	正用	過剰	非使	TLU
初級 5人	話者	17	2	0	89	初級 5人	話者	7	0	1	88
	他者	0	0	0	—		他者	3	0	0	100
	その他	0	0	0	—		その他	0	0	0	—
中級 10人	話者	38	3	0	93	中級 10人	話者	16	0	2	89
	他者	5	1	0	83		他者	10	0	1	91
	その他	8	0	0	100		その他	1	0	0	100
上級 10人	話者	50	2	1	94	上級 10人	話者	30	1	2	91
	他者	22	0	0	100		他者	10	0	0	100
	その他	2	0	0	100		その他	1	0	0	100
超級 5人	話者	27	1	0	96	超級 5人	話者	10	0	1	91
	他者	3	0	0	100		他者	2	0	0	100
	その他	2	0	0	100		その他	3	0	0	100
合計		174	9	1	95	合計		93	1	7	92

第四に、移動主体を見ると、初級では「話者」及び「他者」、つまり人だけであるが、中級の韓国語・英語母語話者には「その他」もあり、人以外のものも移動主体として用いられていることがわかる（中級レベルの「その他」の使用は、韓国語母語話者がクルに2例、英語母語話者がイクに8例、クルに1例）。ただし、中級学習者に使用されたのは、全て乗物や郵便物という具体物で「動くもの」としてとらえやすいもので

あった (例 3)。

例 3) [韓国語母語話者・中級]

S : 7時ごろに、あの、韓国から来た、郵便物ありました。

上級・超級になると、どの母語でも移動主体に「その他」が用いられており、「労働運動」(例 4) や、「ショック」(例 5) のように、より抽象的なものが移動主体として表現されていた。

例 4) [韓国語母語話者・上級]

S : (韓国の労働運動は) 過激派のリーダーとかいけば、そのリーダーに従って、あのう、全く違う方向に、あのう、行く場合もすごく多いんですね。

例 5) [韓国語母語話者・超級]

S : 日本人はこうあるだろう、確かにこうだろう、とあまりこう、固くですね、先入観、なくなったっていうか、そういうところから来たショックですね。

以上、本動詞イク・クルの使用状況をまとめると、「母国から日本」への移動を除き、移動表現としてはクルよりもイクのほうが使用されやすいこと、日本語能力が上がるに従い移動主体が人(表中の「話者」、「他者」)以外にも拡張され、イク・クルを抽象的な意味(表中の「その他」)で用いることができるようになることがわかった。

4.2. 補助動詞テイク・テクルについて

次に、補助動詞の使用状況をみる。なお、初級では英語母語話者に「歩いてきます」(①-1) が 1 例みられただけであるため、表は中級以上の分析結果を載せる。

全体としてみると、本動詞と異なり、テイクよりもテクルの使用数のほうが多い。レベル毎に使用状況を比較すると、中級では、「①-1」と「①-2」(例 6) はどの母語でも正用が見られる。

例 6) [韓国語母語話者・中級]

S : 家にまた戻ってきて、あの、コンビニストアのラーメン買って、しかし、「物理的空間移動」の中でも、「①-3 対象物の移動」は上級・超級になっても全く正用が見られなかった。上級レベルで、使用が義務的な箇所にも用いることができない例もあった (例 7)。

例 7) [英語母語話者・上級]

S : でも、今朝、両親がアメリカから電話しましたね、【←電話してきました】

【表4：中国語母語話者テイク・テクル使用状況】

用法		中級10人				上級10人				超級5人			
		正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU
①-1 移動と方向	テイク	1	0	0	100	4	0	0	100	1	0	0	100
	テクル	1	0	0	100	1	0	0	100	1	0	0	100
①-2 方向	テイク	0	0	0	—	1	0	0	100	0	0	0	—
	テクル	1	0	0	100	13	0	0	100	1	0	0	100
①-3 対象物の移動	テイク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	テクル	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
②-1 存在	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
	テクル	1	2	0	33	14	0	0	100	2	0	0	100
②-2 知覚	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
	テクル	0	0	0	—	3	0	0	100	2	0	0	100
③時間的用法	テイク	0	0	0	—	15	0	2	88	5	0	0	100
	テクル	0	1	0	0	26	1	2	90	10	0	0	100

【表5：韓国語母語話者テイク・テクル使用状況】

用法		中級10人				上級10人				超級5人			
		正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU
①-1 移動と方向	テイク	0	0	0	—	1	0	0	100	0	0	0	—
	テクル	3	0	1	75	5	0	1	83	2	0	0	100
①-2 方向	テイク	0	1	0	0	2	0	0	100	1	0	0	100
	テクル	3	0	2	60	5	1	0	83	13	0	0	100
①-3 対象物の移動	テイク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	テクル	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
②-1 存在	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
	テクル	2	0	0	100	2	1	0	67	3	0	0	100
②-2 知覚	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
	テクル	0	0	0	—	1	0	0	100	1	0	0	100
③時間的用法	テイク	0	0	0	—	3	0	0	100	19	0	0	100
	テクル	0	0	1	0	2	0	0	100	11	0	0	100

【表6：英語母語話者テイク・テクル使用状況】

用法		中級10人				上級10人				超級5人			
		正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU	正用	過剰	非使	TLU
①-1 移動と方向	テイク	0	0	1	0	1	0	0	100	0	0	0	—
	テクル	4	0	0	100	1	0	0	100	0	0	0	—
①-2 方向	テイク	0	0	0	—	5	1	2	63	0	0	1	0
	テクル	2	0	1	67	7	2	3	58	4	0	0	100
①-3 対象物の移動	テイク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	テクル	0	0	0	—	0	0	2	0	0	0	0	—
②-1 存在	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	0	0	0	—
	テクル	0	0	0	—	2	0	3	40	6	0	0	100
②-2 知覚	テイク	0	0	0	—	0	0	0	—	1	0	0	100
	テクル	0	0	0	—	4	0	0	100	2	0	0	100
③時間的用法	テイク	0	0	0	—	7	0	0	100	9	0	3	75
	テクル	0	0	1	0	9	3	1	69	7	0	0	100

上級・超級になると、「②認知的用法」や「③時間的用法」にもテイク・テクルが多用されている。時間的用法は、テイクが現在から未来、テクルが過去から現在への経過を示す用法が多く観察された。中国語母語話者では、テイクの90% (18/20)、テクルの84% (32/38)、韓国語母語話者では、テイクの63% (12/19)、テクルの82% (9/11)、英語母語話者では、テイクの94% (15/16)、テクルの79% (15/19)がこの用法であった。以下のように、話者が基準とする時間が過去におかれている場合でも、やはり過去から現在への経過を表すためにテクルが用いられている。これは、結婚式のスピーチをするというロールプレイの場面である。

例8) [英語母語話者・超級]

S: (新郎とは) ちょっとある団体と一緒に仕事しないといけないことがありまして、まあ、ね、毎日のように夜中に電話があつたりして、まあその時からいろいろと親しくなってきたわけなんですけれども、

「親しくなった」のは「そのとき」以降のことを表わしているため、「親しくなっていた」も可能だと思われる。続く発話では、現在を基準として未来を示す用法にテイクが用いられていた(例9)。

例9) [英語母語話者・超級]

S: (新郎は) すごくいい家族築いていけるんじゃないかな、という風に思いますからね、まあこれからも一緒にがんばっていきましょう、

以上、補助動詞テイク・テクルの分析結果をまとめると、初級ではほとんど使用が見られないが(英語母語話者に1例のみ)、中級で物理的空間移動の用法が使用されはじめ(表の①-1と①-2)、上級・超級になると認知的用法(表の②-1、②-2)や時間的用法(表の③)が使用されるようになっていく過程がうかがえた。また、テイクとテクルでは、全体的にテクルのほうが使用されやすいことがわかった。

5. 考察

以上の分析結果から、まず、研究課題1のイクとクル、テイクとテクルでは、どちらが先に習得されるかという点について考察する。

イクとクルを比較すると、初級学習者が使用したクルは「母国から日本」への移動を表わす用法がほとんどであり、これ以外の移動にはイクが過剰使用される傾向が見られた。「母国から日本」への移動にクルが当初から正確に使用されているのは、自己

紹介などで多用され、日本語の教室でも導入される表現であることが考えられる。従って、全体としてはイクの使用が先行すると推測される。イクが先行する理由としては、母語習得で指摘されているようにイクでは移動主体と話者の視点とが一致するため（斉藤・久慈 1985）ということが考えられる。この説明が正しいとすれば、移動主体が話者である場合は特に視点を移動主体に合わせやすく、イクが選ばれやすいと予測できる。しかし、本研究の分析資料では、話者が主語となることが圧倒的に多かったため、移動主体の違いによりイク・クルの使用状況が異なるかどうかは比較できなかった。

補助動詞テイク・テクルについては、テクルのほうが使用されやすく、本動詞と異なった使用傾向であることがわかった。これは、まず、テクルを使用していたのがほぼ中級レベル以上に限定されていたため、この時点では既にクルも使いこなせるようになっていたとことが考えられるだろう。また、テクルのほうが日本語母語話者でも使用頻度が高いという可能性も考えられるが、これについては実際に母語話者のデータを分析し、確認することが必要である。

次に、研究課題2のイク・クル、テイク・テクルの用法の広がりについて考察する。

イク・クルの多義性と習得の関連については、日本語能力が上がるに従い、イク・クルの移動主体が「人→乗物・郵便物→現象・出来事」へと拡張していく過程が見られ、人の物理的空間移動というプロトタイプの用法から抽象的な移動へと広がっていくことが確認された。

テイク・テクルに関しては、イク・クルよりも出現は遅れるが、やはり物理的空間移動が早く習得され、そこから認知的用法、時間的用法に使用が拡張されていく過程がうかがえた。しかし、「母が小包を送ってきた」のような「対象物の移動」は、分析資料中に正用が全く見られなかった。「対象物の移動」は、他者の話者（及び話者が視点を置く人物）に対する働きかけを示し、話者の態度がかかわってくるため、他の物理的空間移動を示す用法よりも複雑な用法であることが考えられる。

以上、イク・クル、テイク・テクルの習得について考察を進めてきた。本研究はデータ数は少なく習得の全容を解明するには不十分であるが、ここで観察された傾向を以下にまとめる。

- 1) 本動詞イクとクルでは、話者の視点と移動の方向が一致するイクのほうが使用されやすい。

- 2) 補助動詞テイクとテクルでは、テクルのほうが使用されやすい。
- 3) 日本語能力が上がるに従い、イク・クルのプロトタイプである人の空間移動からより抽象的な移動へと使用が広がって行く。
- 4) 補助動詞のテイク・テクルにおいても、プロトタイプの物理的空間移動から非プロトタイプである認知的用法、時間的用法へと使用が広がっていく。

こうした傾向が観察されたが、本研究の分析資料は自由発話であり、ある用法が観察されなかったとしても未習得なのかどうかは明らかでない。今後は、ストーリーテリング等の誘出發話や文法性判断テストを用いた調査を実施し、本研究と同様の傾向が見られるかどうかを検証したい。また、第二言語を習得する際に母語の影響が見られることはしばしば指摘されていることであり、学習者の母語の移動動詞を調べ、その影響を考察することが必要である。

6. おわりに

本研究では、OPI コーパスを用いて英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者のイク・クルテイク・テクルの習得状況を、話者の視点と多義性という観点から分析を行なった。分析の結果、イクとクルを比較すると、イクの方が過剰に使用される傾向があることがうかがえた。こうした傾向の要因としては、イクは話者の視点と移動方向が一致するため、学習者に使用されやすいのではないかという可能性を指摘した。また、多義性に関しては、学習者の日本語能力が上がるに従い、本動詞・補助動詞ともにプロトタイプの用法（物理的空間移動）から、非プロトタイプの用法（抽象的移動）へと使用が広がっていく過程が観察された。以上により、多義語の習得についてはプロトタイプ理論による説明が有効であり、さらに、補助動詞の習得には本動詞との意味のつながりが関わっているとの示唆が得られたが、その検証は今後の課題としたい。

謝辞：本研究を進めるにあたり、上智大学の小柳かおる先生にご指導を賜りました。

また、お茶の水女子大学の森山新先生から、きめ細かいご助言をいただきました。

ここに記して謝意を表します。

注

- (1) KY コーパスは、平成8～10年度科学研究費補助金基盤研究「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」(カッケンブッシュ寛子代表)において、鎌田修氏と山内博之氏を中心に作成されたコーパスである。

引用文献

- (1) Hasegawa, Y. (1993) Prototype semantics: A case study of *te k-ik-* constructions in Japanese. *Language & Communication*, 13, 45-65.
- (2) Lakoff, G. (1989) *Woman, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*, Chicago: Chicago University Press. (池上嘉彦他訳, 1993『認知意味論』紀伊國屋書店)
- (3) Rosch, R. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories. In T. E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*, NY: Academic Press, 111-144.
- (4) Rod, E. (1994) *The study of second language acquisition*, Oxford University Press.
- (5) Shirai, Y. (1995). The acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL learners: Prototype and Transfer. 『語学教育研究論集』12, 大東文化大学語学教育研究所 61-92.
- (6) Tanaka, S. (1987) The selective use of specific exemplars in second language performance: The case of dative alternation. *Language Learning*, 37, 63-88.
- (7) 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』南雲堂
- (8) 大塚純子 (1995) 中上級日本語学習者の視点表現の発達について:立場志向文を中心に』『言語文化と日本語教育』9, 281-292.
- (9) 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- (10) 斉藤こずゑ・久慈洋子 (1985) 「ディスコース知識：指示能力」『会話能力の発達段階』科学研究成果報告書 (代表者 岡部慶三) 15-39.
- (11) 白井恭弘 (1998) 「言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子編『ボーダーレス時代の外国語教育』未来社 69-108.
- (12) 田中茂範 (1990) 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社出版
- (13) 浜田真理子 (1989) 「『行く/来る』と『ていく/てくる』の意味のつながり」『Sophia Linguistica』27, 45-56.
- (14) 森田良行 (1993) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院

(お茶の水女子大学大学院)

An Acquisition Study of *IKU/KURU* and *-TEIKU/-TEKURU*
by JSL Learners: Based on an OPI Corpus Analysis

SUGAYA Natsue

This study aims to examine JSL learners' acquisition processes of the basic motion verbs *IKU/KURU* and the related auxiliary verbal expressions *-TEIKU/-TEKURU* in terms of learners' proficiency levels, using the ACTFL-OPI (Oral Proficiency Interview) corpus.

The results from this study, which was descriptive in nature, show the following tendency.

- i) Comparing the two main verbs *IKU* and *KURU*, *IKU*, for which the speaker's point of view corresponds to the direction of movement, is used more often than *KURU*.
- ii) Comparing the two auxiliary verbal expressions *-TEIKU* and *-TEKURU*, *-TEKURU* is used more often than *-TEIKU*.
- iii) JSL learners acquire the prototype meaning of *IKU/KURU*, which indicates a physical motion of human beings, then extend their use to less prototypical meanings.
- iv) JSL learners acquire the prototype meaning of *-TEIKU/-TEKURU*, a motion in physical space, then extend their use to less prototypical metaphorical meanings.

iii) and iv) suggest that Prototype Theory could explain the acquisition of polysemic words such as *IKU/KURU*.

(Graduate School, Ochanomizu University)